

Title	西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(下) : 集落の移動と生活空間
Sub Title	Arcaeological study on the changing of life environments II
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.3 (1965. 12) ,p.101(401)- 116(416)
JaLC DOI	
Abstract	<p>A. Geographical background B. Outlines of Reserches 1. Excavations of the Ancient village sites (Vella Lavella island) 2. Reserches on the Stone Monuments (Vella Lavella, Choiseul, Simbo, Ganonga, New Georgia island) 3. Excavation of the traces of Irrigation terrace (New Georgia island) 4. Reserch for the cave site (Choiseul island) 5. Notes on the pottery making technique (Choiseul island) C. The Migration and the life area 1. The village at present day 2. Some legends and folktales on the migration 3. The village in the past (consideration on the village sites) 4. Territories of the economic life A. Agriculture B. Fishing C. Hunting 5. Composition of the life area 6. Relationship between the clan areas and the island group of Roviana culture D. Some perspectives From August to the end of October 1964, Archaeological and Ethnological instituute of KEIO University sent a reserch party to Western Solomon islands in Melanesia. As a member of this party, the writer carried out archaeological investigations mainly concerned with the Megalithic monuments, the traces of irrigation terrace and ancient village sites at Vella Lavella, Ganonga, Simbo, Choiseul and New Georgia island. Western Solomon islanders are Melanesian, but much darker in skin colour than those of surrounding islands. They have the . typical black skin and frizzy hair. At present time, the villages situate all without exception on the cost around island, and the mountainous island forms uninhabited area. But in ancient time, people lived in the mountains according to some traditional informations, for example the legend on origin of Vella Lavella people. As a result of the first reconnaissance some village sites ware discovered at the inland of Vella Lavella island. Then the excavation work was conducted at Tu'umbuo mountain (about 600 meters above sea-level) and Veala mountain (about 300 meters above sea-level), tow places of them. A story says that Tu'umbuo was the first settlement in all Vella Lavella island and Veala is originated place of the name of Vella Lavella. These old village sites are characterized by house-platforms or mounds and in the majority of cases the presence of visible remnants of the original kerbstones defining the house perimeter enables the house plan to be reconstructed. At Veala forty-eight dwelling sites was revealed on the top of mountain and along the narrow ridges. In view of a result of the excavation, these village sites are located within a limited area and constitute impressive regularity of layout. The settlement pattern observed is that some rectangular or oval house-platforms surround a round one which has a fireplace, and three or four groups of like this pattern make up one village. A large number of artificial remains were discovered from the trenches. They are stone adzes, shell bracelets, shell moneies, stone flatwares, stone jars, rubstons etc., and plenty of round stones or cooking stones came from each dwelling sites. The stone adze is the melanesian type as it is called, polished with oval or lenticular cross-section. But there is no potsherd. At present time the pottery has not important role in native's life also, the absence of pottery making tradition is very interesting on cultural history in this area. Nowadays, characteristics of these sites were escaped native's memory, but some traditional informations still offer the possibility of reconstructing the nature of the settlement. Nevertheless the settlement patterns are different between present and ancient village, it can be concluded that these old sites were left by the forerunners of the present village peoples. Then, for what reason and when the peoples came down to the cost area? The migration from mountain to cost, it occured at beginning of the contact with European, because it is possibly accounted for by the fragments of glass which ware dug out at E-3 section trench of Veala site. The writer considers that this migraion is a reflection of culture change and a cultural adaptation, that the native culture adapted itself to outside influences by Christian missionaries, the traders and the governmental actions without changing the system of ecologic niche or frame, of life area. The theoretical meaning of the migration is a transposition of arrangement in life area that is based on activities for livelifood. Therefor, the writer supposes, the migration took place with the decline of head-hunting and the decrease of defensive fonction of mountain region and began to break smoothly the exclusiveness on a part of culuural aspects. Notes in this paper are very brief, the writer intends to report about each problem in detail on anotherday.</p>
Notes	調査報告

Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651200-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(下)

— 集落の移動と生活空間 —

近 森 正

III 集落の移動と生活空間

今回の考古学的調査の結果、われわれはメラネシア文化史研究のための、いくつかの資料を得ることが出来たが、それらに関する考察は別の機会にゆずりたい。われわれが考古学的方法によって明らかにした過去の住民の生活と、そのひろがり、それ自体、ヨーロッパ文化との接触を境にした文化変化の起点を示すものとして捉えることができる。ここでは、ある時期を境にして全く異なった立地に集落を移動させ、それにともなって大きな社会的文化的変化を経過してきた現在の島民の生活空間がもつ歴史的な意味を考えてみたい。

(一) 現在の集落

われわれは調査期間の後半を Vella Lavella 島 Paramata 部落を選定して、そこで定着調査を行なった。Vella Lavella 島は、英領ソロモン諸島を形成する内帯の頭部に位置し、南北二二三マイル、東西十八マイル。諸島内では中等位の大きさの島である。いく

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(下)

つかの火山を含む山々の連なりがあつて、最も高い標高は三〇〇〇フィートを示めている。一九六三年における原住民の推定人口は、三、二八六八人。南端部 B'ola にメソジスト派のキリスト教布教所の支部が置かれている。島の西側には、それを大きく縁どる Beagle 湾の中に、Baga 島が附属している。Paramata 部落は、丁度この Baga 島の対岸、Vella Lavella 島西岸の略々中央に位置し、後方に山地を背負い、海に西南面する狭い海岸低地に設営されている。それは西部ソロモン諸島における最も典型的な集落景観を示めていると思われる。現在、この地方の島々では、内陸の間部は完全な無住地帯になっており、集落はすべて海岸低地に、その立地を置き、島をめぐる海岸低地に住民の生活の本拠が営まれている。静かな海に浮ぶ Baga 島を前景にもつ Paramata 部落は、人口二〇七人、(他にわれわれが調査を行った部落の人口は、Choiseul 島 Malagano 約三〇〇人、Ganonga 島 Mondo 約二〇〇人、Vori 三五〇人などで、人口の点からみても、ほぼ標準的な部落とみて差支えない。)全戸数二七戸、別に教会一、(メソジスト派

(四〇一) 一〇一

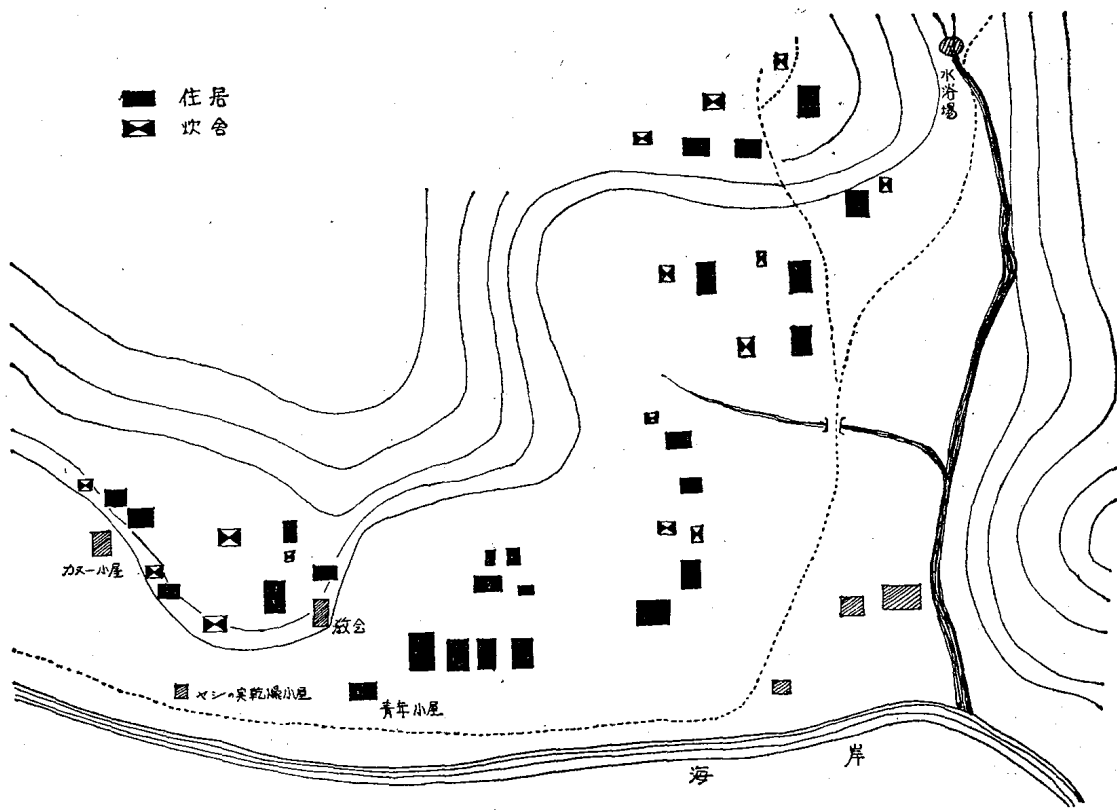


Fig. 6
Vella Lavella 島 Paramata 部落
集落配置見取図

から分離して新らしく成立したCFC派) カヌー・ハウス一、エレクション・ハウス一、ココヤシの実の乾燥小屋二、など。これらの家屋は、海を前面にして、ほぼ一列に並ぶが、その西端において独立丘陵 Teterana が、海に張りだしているという地形的な制約を受けて、集落はこゝで北側に折れて七戸が別のブロックを形成している。そして家屋の並びと海岸との間に道路が海岸線に沿って設けられている。住居は、一組の夫婦家族によって使われるリビング・ハウスとしての母屋 (Mamba Pande) が、クッキング・ハウスとしての炊舎 (Raro Pande) をともなう一つ一つの屋敷を構成するが、Paramata 部落では、酋長 (head man) である Silas の家以外に、その屋敷の範囲を示めすような明確な標識をもたない。一般に道路に面して母屋が建ち、その後、海岸森林との間に炊舎が建つ。用水は天水又は部落の北奥、後背斜面と海岸低地との接触線上にある湧水を用いている。便所は通常、海岸における一定の場所を使用するが、性別による区分は厳格である。次に家屋についてみる。母屋には切妻方形高床型式と寄棟方形平地型式の二種をみる事ができる。(この他、Choiseul 島 Malagano, Sirovana では妻の両端に半円形の張り出しのつく平地式住居がある。) 一〇年来、イギリス政府と W.H.O の環境衛生指導が、豚の飼育を禁止することゝ合せて、高床式家屋を奨励しているために、現在では高床式が一般化する傾向にあり、平地式は、老人の住む家屋に限られている。家屋の屋根に用いる Heve Nut の葉がいたんでくる通常四〜五年目で屋根をふきかえる。最も一般的な切妻方形高床式の家

屋についてみると、間口五米 (Zoke Ta=三コロ)、奥行六米(三ヒロ半)棟までの高さ四米六十糎、軒までの高さ三米四〇糎、床面までの高さ八十糎。柱 (Barabara) 十一本、床柱 (Sapera Barabara) 十六本、横梁 (Konga) 四本、縦梁 (Oke) 七本をもつ。窓は両側面につけられ、入口は妻側につき、丸太に切り込みをつけた階段で昇降する。母屋では、火の使用は一際行われぬ。炊事は母屋とは別棟として建てられた炊舎で行なわれ、これは食堂を兼ねている。炊舎は、通常、切妻で床がなく、中央に円礫を積み上げた炉 (Uza) があり、奥に竹を横に並べて棚をつくっている。間口四米五十糎、奥行三米。家屋の建築は部落の男子全員が参加して約二週間位でつくり上げる。道具は、柱を立てる穴をつくる掘棒 (農作業用のものと全く同じもの) と、ブッシュナイフだけである。柱穴には珊瑚石が詰められる。炊舎と住居を区別する習慣は、山間集落以来の伝統的なものであると考えられる。

(二) 集落の成立を物語る伝承

さて、このような集落形態と家屋をもつ海岸集落は、いつ、どのようにして成立したのであろうか。これについて、Paramata の Silas 老人の語ってくれた次の説話は、重要な情報を与えるものである。それは、彼ら自身の歴史でもありと考えられるからである。

《昔、Vella Lavella には人が住んでいなかった。Savo 島に一人の呪術師 Rasatitio と彼の弟の Mebekovo という兄弟が住んでいた。彼らは家の近くに魔法の竹を植えていた。風が吹くとき

には、その竹はいつもゆれて歌をうたった。彼らは、それがあるために幸福だった。ところが或日、鳥が飛んできてその竹の枝先にとまった。すると一人の少年が、その鳥をうとうとして、あやまってその竹の枝先をうってしまった。その時以来、竹は歌をうたうことを止めてしまった。Rasatitio はそれに気がついて弟とともに大層、悲しがった。そして彼らは、ソロモンの他の地にこれと同じ竹がないものかと考えた。翌日、彼らは、その竹を探し求めて、Savo 島を発ち、旅にでることにした。彼らは Savo 島から Vesala、Vesala から Simbo 島へ向った。そして Simbo 島を発って Ranonga 島へ向った。Ranonga 島は住むのによい土地ではなかった。それで、彼らは Ranonga 島をあとにして Baga 島へ来た。そこで彼らは尋ねた。「ここ、に誰か住んでいるかね。」すると一匹のカニが答えた。「私達がここに住んでいます。あなた達が住むのには良いところではありません。」そこで彼らは Baga 島を離れて、Vella Lavella 島の Kilebembala に着いた。そして彼らは、カヌーを捨て、Tu'umbuo の山に登った。それから彼らは竹の植わっている Pukale に降り、竹をとり、再び Tu'umbuo の山に戻ってきた。それから彼らは、そこで家を建て、畑をつくった。彼らは呪術師であったから、彼らの一族は Kubotoutou と呼ばれた。それから、その一族は Tu'umbuo から Kumboro の山に移り、Kumboro から Topolando の山に移り住んだ。そして、別の一派は、Tu'umbuo 山から Vela 山に移り住んだ。また別の一派は、Tu'umbuo 山から Oji 山へ、Oji 山から Marikutu へ移り住ん

だ。また他の一派は、Tu'umbuo から Mudi へ、それから Kuta-kabai へ移った。また別の一派は Tu'umbuo から Tabasala へ、それから Kubolebu へ、さらに Mudasa の丘へ移り住んだ。そしてまた別の一派は Tu'umbuo 山から Urumage の山へ移り、そしてまた最後の一派は Tu'umbuo から Zimia へ移り住んだ。それだから、Tu'umbuo 山は、Vella Lavella 島に住む人々のすべての母である。》

この説話の中に出てくる地名のことごとくを、現実の場所へ比定することは困難であるが、その主要な移動は、地図の上で跡づけが、かなり可能である。

さらにまた、彼らは次のようなことを信じている。《Paramata の住民の祖先は、昔 Veala 山に住んでいた。その頃、人間は大きな身体をしていた。今の人間は、海岸へ移り住むようになって病気にかかり、小さな身体になってしまった。だから山の中の方が住みよいのだ》これはヨーロッパ人と接触した初期のころ、外から入った悪病によって、著しい人口減少をきたした事実を物語っているものであろう。なお Veala 山から Paramata へは、Jolio, Niatovilu を経てきていることが、他の伝承によって確認された。このように現在の海岸集落の住民が過去において、山間に居住地をもっていたという伝承は、New Georgia 島 Visu Visu, Simbo 島 Masulu, Ganonga 島 Mondo, Vori, Choiseul 島 Malagano などでも、同じように採集された。

さて、こうした伝承が、果して事実を示めているものであろう

か。それについて、まず注意を向けなければならないのは Choiseul 島にみられる言語地域のあり方である。Choiseul 島の東側には、はっきり区別できる四つの言語地域が成立している。すなわち西側から (1) Vavua 地区 (2) Taula 地区 (3) Warasi 地区 (4) Senga 地区に分かれ、このうち、Taula 地区の言語と Warasi 地区の言語の間には幾分類似した要素があるが、他の二つの地区との間には、相互に全くコミュニケーションが成立しない程に、相違している。*このような言語地域を越える相互のディス・コミュニケーションは、全く驚くべきものであるが、しかし、それにもまして注目すべきことは、これらの言語地域の区分が、西北から東南に細長くのびるこの島を、横に切って形成されているという事実である。すなわち、島の両岸で同じ言語が話されるのに対して、片側の同じ海岸線に沿って、距離を置いた地域では、全く異った言語が用いられているということである。このことは、分水嶺から、島の両岸に向けて水が流れ出すようなかたちで、人間の移動があったことを示唆していると考えられるのである。この問題は、メラネシア社会の特質を考え、また、その歴史を組み立てていく上で、非常に重要な意味をもっていると思われる。われわれは、この問題の解決にあたって考古学的方法をもってするのが、もっとも確実であり、早道であると考えた。そこで山間部を踏査した結果、Paramata 部落との間に、最も関係の深いとみられる Veala 山と、説話の上で、すべての住民の起源地として語られている Tu'umbuo 山において、集落遺蹟を発見し、発掘調査を行なった。そして、そ

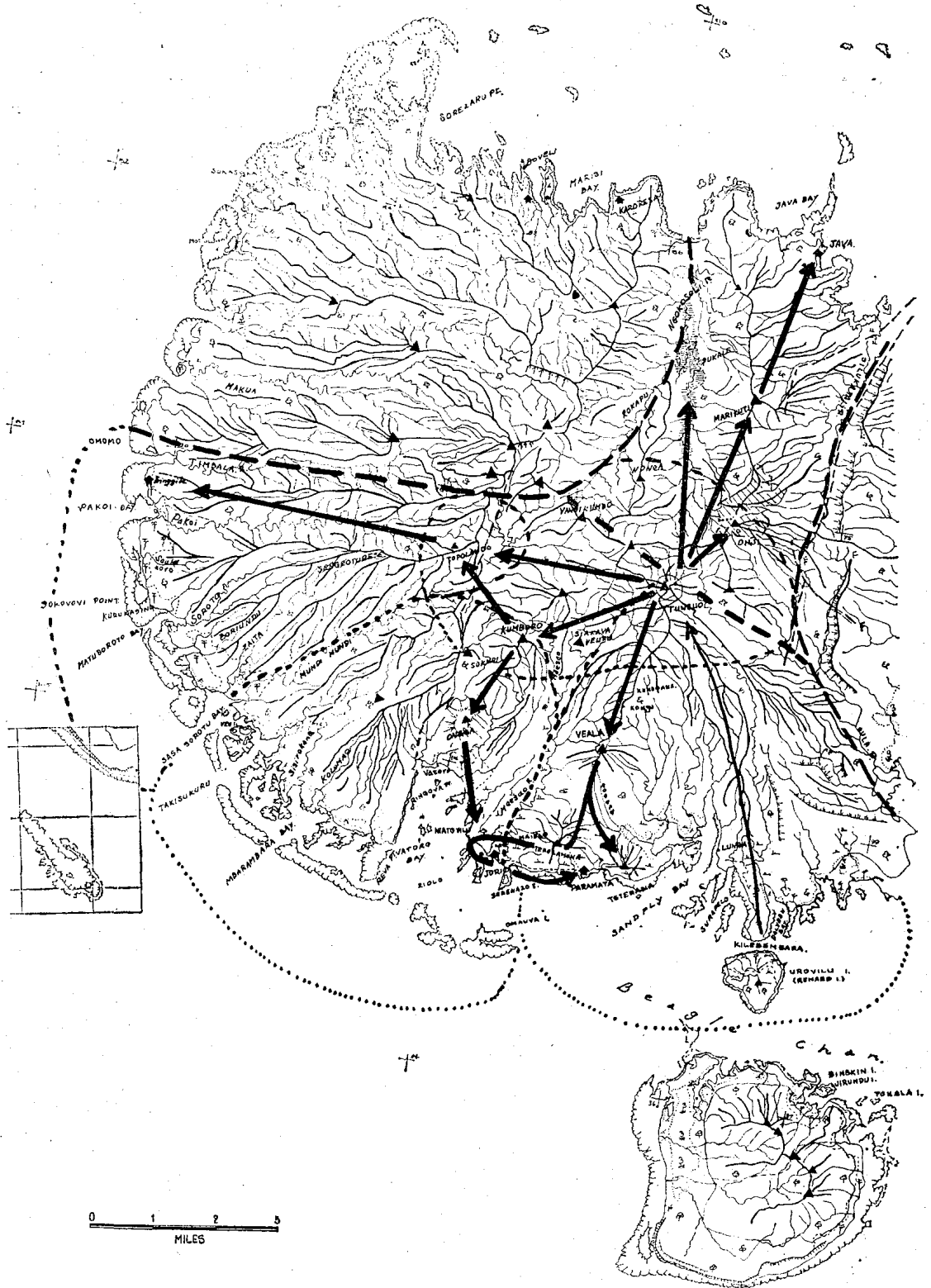


Fig. 7

Vella Lavella 島西部

矢印は伝承によってたどりうる集落の移動を示めす

れにもなつて、過去の生活に関するいくつかの遺蹟の調査を行ない、あわせて山間集落の住民がもっていた生活の舞台を復原することに努めた。

* A. Capell は、Choiseul 島において、六つのダイアレクトをみとめて居る。1. Mbambatana 2. Tambatamba 3. Varese 4. Ririo 5. Sengga 6. Kirunggela (A. Capell: Notes on the Islands of Choiseul and New Georgia Solomon Islands, Oceania Vol. XIV, 1943. pp. 20~29)

(三) 過去の集落

過去の集落について、われわれは、Vella Lavella 島の山間において、標高約六〇〇米の Tumbuo 山と、標高約三〇〇米の Veala 山の二地点で、集落址を発見し、発掘調査を行なった。その概要については、すでに記載した。要約すれば、以下の如くである。われわれは、Veala 遺蹟において、山頂部と稜線に沿って合計四八戸の住居址を発掘し、そのセツルメント・パターンを抽出することができた。住居址は、おむね高さ三十糎〜二米に土を堆積し、周囲を円礫で積み上げた、いわゆる家屋基壇をなすもので、炉址をもたない方形、または楕円形住居址七〜十四戸が、炉址をもつ比較的大きな円形住居址をとり囲んで、一つのセクションをなし、いわゆる塊状集落を構成している。出土した遺物は、磨製石斧、石皿、凹石、兩垂石、砥石、貝輪などで、それらの石器類のセットが、炉址から採集された、炭化した堅果類の種子と合わせて、食生活の

基本が、イモ類や、その他の植物性食料にあったことを示めている。集落の設営された上限年代については、何ら手がかりを得るに至っていないが、その下限年代が、ヨーロッパ人との接触前後、すなわち十九世中葉から、今世紀のはじめ頃にあったことは、出土した濃緑色のガラス片などによって明らかになった。

さて、この山間の集落がもっていた立地上的意義が、首狩や戦争のための防禦的性格にあり、その点において、海岸部に比べて山間部の方が、はるかに優位性が高いことは明らかである。(太平洋戦争期間中、日米両軍の進駐がはげしくなったとき、彼らは山間に逃げ、部落を一時的に移しているが、この点に関して興味ある行動といえる。) 海岸から遠く隔たる山間、しかも山頂から尾根の上に密集して形成された塊状集落は、それが居を移すにしたがって放射状に分かれ、海岸線へ向って降りながら、広がっていった。こうして、山間部から海岸低地へ集落の立地を移動させる契機を与えたのは、おそらく、(1) 白人貿易商人 (Trader) のもたらす布地、鉄製品、ガラスびんなどの容器、ときには銃機などの魅力。(2) キリスト教布教団 (Missionary) の働きかけ。(3) 殖民政策に基づく政府官吏の到来などが、山間の住民を海岸部へひきつける大きな力となったことが考えられる。そして、それは何よりも、首狩の風習の衰退と大きな関係があるように思われる。集落立地が、山間から海岸へ移ったときに起った、社会的文化的変化については、いくつかの点について考えられる。例えば、Veala 集落遺蹟の示めす居住様式と、現在の Paramata 部落のそれとの間には、すでに

のべたように、Settlement Patternの上で、明瞭な相違を指摘し得る。そのことは社会組織上の相違と無関係ではあり得ないだろう。氏族的な集団の結束の度合において、何らかの相違を反映していると考えられる。また、精神文化の面では、キリスト教の強力な働きかけは、伝統的な精神文化を変革させたばかりでなく、それに結びつくあらゆる日常生活、価値体系に変化を与えている。また、ヨーロッパ人との接触の初期に、原住民の人口が一時的に著しく減少したらしいことである。これは、未開社会が、文明と接触することによって起る一般的な現象であるとも云えるが、この地域では、ヨーロッパ人のもたらした病害などが原因しているほかに、山間地に比べて海岸低地の方が、その土地のもつ人口支持力が小さいのではないかと考えられる点がある。こうしてみると、集落立地の遷移は、住民のエスノ・ヒストリーにおいて、重要なモメントであり、非常に大きな歴史的意味をもっていたと考えられるのである。次にその集落の遷移がもっていた意味について、考えてみたい。

(四) 生計活動とテリトリー

住民の生計活動についてみると、それは、焼畑の農耕を主軸にして、果樹の管理栽培、木の実の採集、漁撈、狩猟が、それぞれ組み合わせられたかたちで展開している。

a. 農耕及び果実栽培と採集

焼畑では、タロイモ、ヤムイモ、マニオク、サツマイモなどのイモ類、MosiまたはLemaと呼ばれるキャベツを栽培する。農作

業は、通常、夫婦が一组になって行なわれ、男が山林を切り払い、火をつけて焼き、女が掘棒を用いて地面に穴を穿ち、植えつけをし、一〜二ヶ月後の収穫、運搬を行なう。焼畑の立地は、集落の後背斜面あるいは海岸平地と後背山地との接点、又は河口近い氾濫段丘上に設けられており、Paramataの場合は集落地点より半径約一・五マイルの半円内にすべてが入る。しかし、New Georgia島のVisu Visuでの所見では、山地が海岸にせまっている場合、河川の流域に沿って奥へ入る傾向があり、約三マイルの地点にVisu Visu住民の最奥の耕地が開けている。こゝでは出作り小屋が発達し、集落とは河川によってカヌーで結ばれる。焼畑で栽培されるタロイモ Inda は、Kirikiri, Goliti, Ruta, Voraikana, Midizaru, Bokue, Kapopuso, Pinapinaの八種に識別され、河川の流域湿地、或は谷間の湿地で半野生状に放置される湿地性タロイモ二種 Lutu, Wopa (Paramata) と区別する。たゞし湿地性タロイモは殆ど常食としては利用されていない。サツマイモは、ソロモンへはニュージランドからヨーロッパ人の手によって伝えられたものらしく、現在最も重要な食料になっており食料評価の殆ど一位を示めている。栽培果実は、集落の周辺または後背林にパイヤ、バナ、パイナップル、マンゴ、パンの木、Niatu, Tauma, Saru, Pisuka (Paramata)などが栽培されている。コ、ヤシは、海岸低地に栽培され、集落の周囲に至るまで殆どコ、ヤシ林に利用されている。しかし、島民はその果肉をコ、ナツミルクとして用いるほか、栽培の主目的は商品としてコプラを生産するためのものである

から、それは従来の生活にとってはそれ程重要なものではなかった。むしろ彼らの生活にとって最も重要な果実は山腹の第一次林から採集される Manbanene 及び Pati (Paramata) と呼ばれる二

種のナッツである。Manbanene は三稜を有しやゝ大形、Pati は断面レンズ状でやゝ小形である。以上の植物性食料について、収穫期を中心とした一年間の供給カレンダーを Paramata 部落において作成した。これで見ると、タロイモとヤムイモが七月と

	A	M	J	J	A	S	O	N	D	J	F	M
TARO DRY			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
TARO SWAMP	■	■							■	■	■	■
YAM	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
MANIOC			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
SWEET POTATO		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
CABBAGE									■	■	■	■
NUT PATI			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
NUT MANBANENE					■	■	■	■	■	■	■	■
PAPAYA		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
BANANA			■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
PINEAPPLE						■	■	■	■	■	■	■
MANGOSTEEN									■	■	■	■
BREADFRUIT									■	■	■	■
NIATU									■	■	■	■
PISUKA									■	■	■	■
SAURU									■	■	■	■
TAUMA									■	■	■	■

Fig. 8

Vella Lavella 島 Paramata における植物性食料の年間供給

一月を境に六ヶ月づつ相補って一年間の食料供給を完成しており、この二種が最も重要な食料になっていることがわかる。またマニオクとサツマイモがやはり両種が相補って不完全ながら、ほぼ一年間の供給を行なっている。これらに比べて果樹類は殆どが盛夏期の十二月に集中しており、保存法を欠く住民の生活の中では、さして重要性をもっていないように思われる。たゞ六月から九月にかけて大量に採集されるナッツは堅皮を割って仁をとりだし、日光にあて、乾燥させ長期の保存にあてる。調理はタロイモやヤムイモを熱した石積み (Cooking Stones) の中へ入れてバナ、などの柔い大きな葉をその上に重ねてむし焼きにしたものを主食にして、Pipi というコプラミルク (タロイモを搗きつぶし、コ、ヤシの油で煮たり、コ、ヤシの実を削り、炊きカユ状にしたもの) やナッツプディング (バナナ、ナッツ、タロ、ヤムなどを搗きませ、植物の葉で巻いて、とろ火で煮たもの) などが副食になる。なお植物性食料に関連して檳榔子の果実を石灰や胡椒樹の葉と共に噛む習慣は非常に盛んである。

b. 漁撈と貝類の採集

漁撈活動は、男性のみによって行われる。漁法として、(1) 網、(2) 槍、(3) 弓、(4) 釣針、(5) ブッシュナイフで叩く、などがある。網漁法は、柄のついた四ツ手網を用いるもので、大型の Zapu と呼ぶものと、小型の Saru と呼ぶものの二種がある。それらはともに、リーフの内側の浅瀬で、海水に侵って一人で操作される。Zapu は、Sipere という赤味のあるやゝ大型の魚を対象とし、Saru の方は、Siden または Katukatu という小型の魚を捕獲するのに用いられる。これら漁法のうち釣針を用いるもの以外は全て河川や、リーフの中などで個人的に行われ、集団を組んで協同する場合は少ない。総じて漁撈活動における共同作業的結束は後に述べる狩猟活動の場合に比べて、かなり弱いといえる。たゞ、カツオ釣りの場合には成人式の行事とからみあって集団的な行動がとられる場合が多い。カツオ (Iso) の群が島に近づくと村中の男子が三人ずつ一組になってカヌーにのり、その群の中に漕ぎ出す。この時用いられる釣針 (Gairi) はシャコ貝を用いた幹と鱈甲製の鉤とを組合せたもので、幹の先端に糸懸用の刻み目をけづり出し、下部に突起を作って鉤を緊縛し、その結合部からビーズを連ねた紐がついている。通常、成人になるためには、カツオを釣り上げなければならぬ。とくに一定の年齢はないが、十才から十五、六才までにカツオの群が近づいたとき、大人たちに誘われてカヌーにのってでかける。出漁の前にとくにセレモニーはないが、首尾よく釣り上げに成功して帰ってくるとその若人を成人として認めるための儀式が行なわれる。Simbo 島 Masulu の例では、まず村の船つき場の

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(下)

脇にある海にわずかばかりつき出た小丘に最初にとれたカツオをもつて行き、酋長がその頭部を切断してさげろ。これには女性は手をふれることが出来ない。そしてバナ、の葉に包んで蒸し焼きにする。村人全員が集まって大宴会が開かれ、それが済んでからはじめてその若人は成人として認められ、村の構成員となることができろ。Choiseul 島 Sirovana におおし、食用魚類として挙げられたものは二七種、Ganonga 島 Mondo では二三種にのぼった。なお、イルカとサメは食用には供さない点が各島に共通している。また漁撈活動の盛んな時期は、Vella Lavella 島 Paramata では五月・六月・七月の網漁、七月・八月のカツオ、十月・十一月の Ringo, Bakesi と呼ぶ魚を対象とする釣針漁、というように五月・八月と、十月・十一月の二期に集中している。さて、以上各種の漁法・魚種を通じて部落毎に、漁獲のための領域が設定されているのは、網漁だけであって、それは大型の Zapu にも、小型の Saru にも適用される。釣針による漁法及び槍と弓矢の使用は、この規制を全く受けない。Vella Lavella 島の場合では、Paramata, Niatovilu, Iringila の領域にまたがって、さらに広い活動が許されている。次に海産物として、貝類と海藻の採取は女性の手によって行われる。貝類の採集にあたっては、通常、家族単位で行なわれ、彼女らは、ブッシュナイフ(蛮刀)、槍、編袋、編籠などをもち、リーフの内側の腹までつかかる位の深さの海に入って作業をする。採集の時期はとくに定まっていな。食用にする貝類は、シャコガイ(巨人員)、ハイガイを含む二枚貝十種、Paopao と称する巻貝一種の

(四〇九) 一〇九

十一種である。Vella Lavella 島では、この巻貝の採集に対して、網漁法による捕獲領域を規制している。

c. 狩猟

狩猟活動は男性だけに限られ、神聖視されている面がある。(たとえば、Vella Lavella 島 Supato の後背山地 Saluvelando には、直径四米のストーン・サークルがあり、中央に高さ七十糎の線刻文様のある立石が置かれているが、人々は狩猟に行く前に、こゝに来て、さげものをする。この区域には女性が近づくことは許されていない。なおこの中心の立石は、獲物があるかどうかを知るリーダーのような役目をすると思われている。)狩猟の主な対象は、ノブタであるが、その他フクロネズミ、フライング・フォックス(大コウモリ)、ハトを含む鳥類六種などである。ノブタ狩りの場合、部落全体から男が参加し、通常十五人から二十人位で、隊を編成し、最も少いときでも二人、単独では行なわない。常に七〜十四位の犬を伴う。狩猟期として、とくに定まった時期はない。Vella Lavella 島の Paramata と Supato では、七日から十日間に一度、ノブタ狩りにでかける。捕獲は、銃または弓を持つ射手一〜二人、他はすべてブッシュナイフを振りかざして、ノブタの腹部をねらい、頭部を大切にす。捕獲した後、頭部、胴部、腹部を切断して、編袋に入れて運搬する。射手は頭部を自分のものとしてとり、とくにその下顎骨を保存する。肉は狩猟参加者も含めて、その日のうちに村人全員に等量に分配される。そのあと多くの場合、村人全員が集まって大宴会が行なわれる。こうしてみると、狩猟活動は、非常に共

同作業の性格が強く、部落構成員全体によって行なわれ、消費される点で、漁撈よりも一層、結束的である。

さて、こゝで何よりも注目すべきは、狩猟の活動範囲が非常に厳密であり、それが村人全員の間で強く意識されている点であろう。すなわち、Vella Lavella 島 Paramata の住民は、東側を Oula 河によって限り、北は Tu'umbuo 山、Topolando 山、Kumboro 山、Mulolokumbo 山、Veala 山、Sikavaventu 山を含む山域。Niatovilu の住民は、Mundi Mundi 河と Maesao 河にはさまれた Songga 山、Suknoi 山、Kumboro 山、Topolando 山、Mulolokumbo 山、Vansikumbo 山、Tu'umbuo 山を含む山域。Iringgila の住民は、Timbala 河と Mundi Mundi 河にはさまれた Sengeoturese, Topolando 山、それに Kumboro 山、Mulolokumbo 山、Tu'umbuo 山を含む山域を彼らの狩猟領域としている。これを地図の上になどいてみると、Tu'umbuo 山、Topolando 山、Mulolokumbo 山、Kumboro 山を含む中央山間地の大半が、それぞれのテリトリーの中で重なりあい、この狩場として重要な地域を三つの部落の狩猟領域が共有していることがわかる。そしてまた、それらの領域が、すべて、共通の祖先の起源地を Tu'umbuo 山に置くという、伝承の上で語られている氏族のひろがった範囲の中に含まれるのである。このことは、Paramata の東隣にある Supato 部落の狩猟領域が、Monju 河を境として、Zoran 山、Goluduni 山、Zaeba 山、Lulugana 山、Sindikil 山を含む地域を形成している、西側の Paramata の領域に決してか

さなる部分のないことと考えあわせて、非常に重要なことであるように思われる。このように Paramata, Niatovilu, Iringgila の三つの部落が狩猟領域において共有する地域をもち、かつて三部落が協同して狩猟を行なったという村人の記憶は、これらの部落が、経済的関係において結ばれた、もう一つ上のレベルでの社会的機能を果していたと考えられるのである。そしてまた、三つの部落が共同使用する狩猟領域が、本来、Tuumbuo という同一の起源地から、ひろがったと語られている氏族群の占める領域にかさなり、その範囲に限られることは、現在の部落を包む狩猟地としての背景を、それが過去において、それらの氏族の占めていたテリトリーの変化したものと理解することができるのである。

(五) 生活空間の配置的關係

それでは、その生活の地域はどのような要素によって成り立ち、それらが、どんな配置をもっているだろうか。またそうした配置的關係の中で集落の山間部から海岸低地への移動は、どのような意味をもっていたのだろうか。考古学的な調査の結果明らかになった事実と、食料獲得のテリトリーから描きだされる生活空間は、次のような六つの区域から構成されている。(A区)リーフの外側にひろがる海域は、非常に発達したカヌーによる交易関係、過去においては首狩、戦争などを通じて、島々が寄り集まった、より大きな地域圏ないし文化領域を形成する場であり、カツオなど二十数種の魚類を対象にした釣針による漁撈活動の舞台である。(B区)リーフの内側

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(下)

の浅瀬とラグーンは、網漁法による漁撈、女性の手による貝類、海藻の採集場にあてられる。海浜の森林の中、あるいは沖合の小島には第一次埋葬地(era)が置かれている。(C区)海岸低地は、現在の集落が置かれ、住民の生活の本拠になっている。集落の周囲や内部の空地は一面ココヤシ林として利用されているが、それ以外の無住地帯では、マングローブ林やその他の原始林が海岸まで降りてきて集落地をとり囲み、集落を自然景観中のいわゆる文化島にさせている。(D区)海岸低地の後背斜面は、一部果樹の管理栽培が行なわれ、焼畑の格好な農耕地を提供している。みはらしのよい台地の突端には、しばしば二次埋葬地としての配石遺構が設けられている。(E区)焼畑耕地の点在する後背斜面をすぎると黒々とした一次性原始森の山腹に入る。トオン、オトコヤシ、木性羊歯、セタツクやカララの巨大な板根や、支柱根などが熱帯森林の景観を展開する。所々にノブタの足跡をみかける。視界は全きかない。この地帯は住民の唯一の保存食料であるナッツの採集地として、また山頂、尾根を含めて、ノブタ、その他の鳥、獣類の狩猟の場として重要である。(F区)標高三〇〇〜六〇〇米の山稜に近づく樹木は、急速にその高さを減じ、尾根の直下では、直径五〜十厘米程度の細い樹木が雑然とした叢林状を呈し、明らかに第二次林の景観を示めている。この地帯は、過去において集落地として利用され、山稜に沿って莫大な人口を擁した集落が発達していた。

以上にみられる六つの区域は、生計活動を中心に、自然的要素の相違によく対応しており、住民の生活にとって、それがかなり固定

(四一一) 一一一

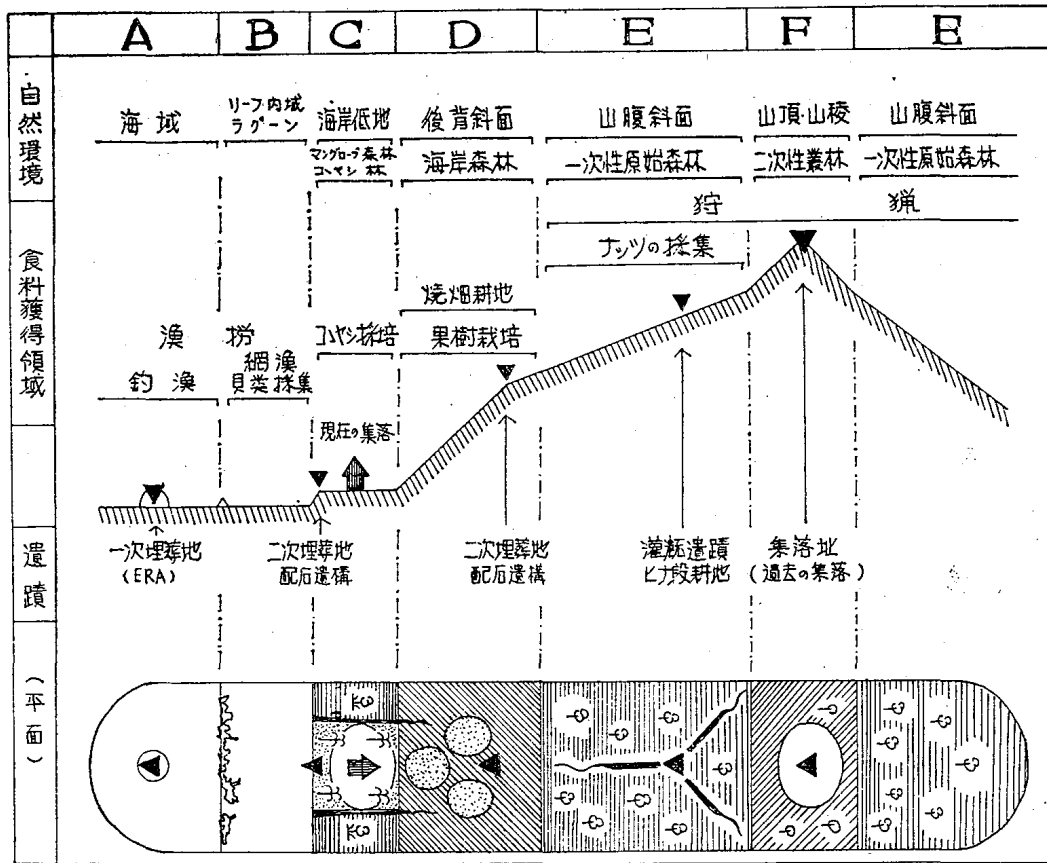


Fig. 9

生活空間の配置的構造

的なものであると考えられる。山間に集落地をおいていた過去にあっても、その住民は封鎖的な、通常考えられるような山岳民であつたわけではない。海のひろがりには、首狩や交易活動を通じて、より大きな地域圏とのつながりを形成し、魚類やその他の海産物資源を、彼らに提供したし、精神生活の上では、二次埋葬地、配石遺構の立地にみられるように靈魂観や死者崇拜が、海との強い結びつきを示めている。従つて、その生活空間には、集落が置かれていた山頂と山稜、それに山腹斜面、海岸低地、そしてその前にひろがる海域のすべてが、その中にとりこまれて、それらのコンビネーションの上に彼らの生活が成立していたのである。こうしてみると、山間部から海岸低地への集落の移動ということは、単なる移住ではなく、それは、すでにのべたような生活空間の配置的關係の中で行なわれた文化現象の一つとして理解することができるのである。

われわれは約三ヶ月間原住民とともに暮らしている間、彼らの西歐的な合理的なものの考え方に接して、たじろぐことがしばしばであった。たしかに、キリスト教への改宗を通じて、彼らのイデオロギーの内部が大きく変容し、過去において彼ら自身もっていた観念をも受け入れなくなっていることは事実である。このように新らしく外からやって来た西歐文化の衝撃に対して、原住民の生活は、イデオロギーの面で変化を起して、それによく順応しているようにみえる。しかし、これを経済的な基盤についてみると、そこに大きな変革が生じたというよう

なものは見当らない。例えば、サツマイモの導入は、主食における評価順位を変えはしたが、それは湿地性タロイモに置きかわったものにはすぎない。Veala 山遺蹟や、Tunbunuo 山遺蹟で発見された、凹石、石皿、磨り石などの遺物の組み合わせは、住居址の炉址から発見されたナツツやその他の堅果類の種子の食料残碎遺物とあわせて、その食生活の内容の示めすものが、現在の島民の生活に、全くそのままひきつがれており、山頂集落の過去の生活との間に変化をみることはできない。この点について住民に大きな変化を与えたキリスト教の影響は、生計活動を中心にした経済行動には関係なく進行したといえる。(現状では華僑の活動に、この面での変化への働きかけが現われてきている。)こうしてみると集落の移動にもなつて、精神文化と、社会組織の一部に大きな変化が起つたのに比べて、経済生活の面における変化は非常に小さかつたと云えるのである。従つて、上のべたような生活空間の体系的な配置関係に対しては、過去から現在にわたつて、伝統的な強いスタビリティが作用しており、そこに基本的な変化がもたらされなかつたとみられるのである。

このように考えてみると、山間部から海岸低地への集落の移動は、その生活空間の体系の中で行なわれた、いわば配置転換であり、その生活空間としての、地域個体のワクを保持しつつ、食料獲得を基盤とした経済生活上の体系を破壊することなしに、ヨーロッパ人との接触がはじまつた頃、1・キリスト教、2・白人商人、3・殖民政府などの、外側からの働きかけに対して、自己調整的な適応の過程において進行した一つの文化的適応のありかたであると考えるこ

とができるのである。従つて、首狩の風習が衰退し、(とくに New Georgia 島 Munda 地方の首狩が衰退してから)山間部のもつ防衛的な機能が減少してくるのに呼応して、集落の海岸低地への移動が始まり、それによつて、その地域個体のもつていた一面における排他性が比較的スムーズに破られていったと考えられるのである。要するに、山間部から海岸低地への集落立地の遷移は、食料獲得を基盤にした生活空間の中の配置的關係を、くづすことなしに、新来のヨーロッパ文化との接触による適応をなしとげた、文化変容過程において行なわれたと考えることができるのである。また、現在の住民の文化価値や規範、社会構成について、こうした生活空間を通して、それを過去へ投射することによつて、それらの行動の合法性を見出す手がかりをうるることができるように思われるのである。

(六) より大きな地域圏とのかゝわりあい

われわれがポータ兼助手として雇つた Choiseuli 島出身の二十才の青年 Silvesta 君は、或日、次のようなことをつぶやいた。「Malaita 人は悪者だ。そして、とても強い。ときどきものを盗み、人を殺す。我々とは全く違った種類だ。Choiseuli, Ganonga, Simbo, New Georgia, Vella Lavella は皆一つの種類だ。そして仲がよい。」Silvesta 君は、西部ソロモンの行政的中心 Gizo 島で大工として三年間働き、その後、ソロモン林業会社で働いているため各島から集まってくる多くの人種と接した経験をもっている。また、これを同じく Choiseuli 島 Sirovana 出身の十八才の

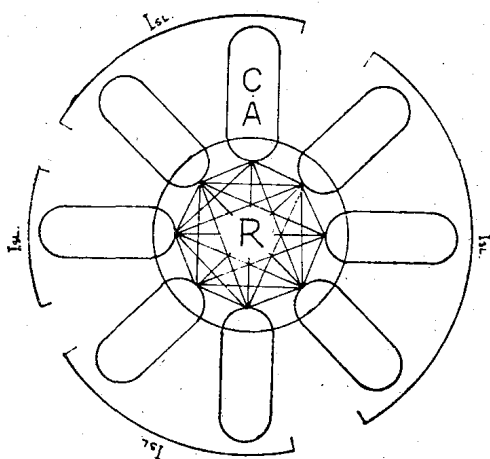
少年 Sonagoromo 君といつて聞かす。Malaita, Isabel, Guadalcanal, Sanchristoval の島民は、自分達と全く違っている。そして Bougainville の島民は、少し違っている。けれども Choiseul, New Georgia, Simbo, Ganonga, Vella Lavella に住む人々は、みんな同じ仲間だと答える。西部ソロモン諸島の五つの島の住民に対するこのような同胞意識は、いわゆる Black people の地域の間で共通して一般的にみることができるのである。また、Malaita 島民に対しても異和感や種族間における葛藤といつてよいものかもしれない。こうした同胞意識が、この地域の島民相互の間に生みだされていることは、この地域内に共通語としてひろがった Roviana 語の役割を考えないわけにはゆかないだろう。Roviana 語は、元来 New Georgia 島の西北、Roviana ラグーンを中心に使われていた言語で、今ではそのオリジナル・バウンダリィをはるかに越えて、New Georgia, Raduvu (Rendova) Duke (Kolombangara) Gizo, Simbo, Ranonga (Ganonga) Vella Lavella, Choiseul, Isabel の一部、Shortland グループの島々にひろがっている。一九一〇年にキリスト教メソヂスト派のミッションが入ってきたときに、この地域への布教にあたって Roviana 語が採用され、Roviana 語の聖書や讚美歌がつけられてくる。このことは、部落ごと、島ごとに異なる言語の多様性を越えて、この Roviana 語が、すでに行きわたっていたことを示すものにはかならない。(“A Roviana and English Dictionary” Zinama Roviana, Zinama Munda, Methodist Mission.)

さて、このような Roviana 語のひろがりを見ると、そこに文化的なかなりの統一性をみいだすことができるのである。それを、いま仮りに Roviana 語文化圏と呼ぶならば、そこは丁度、人種的にパプアを主体とした西方型メラネシア人と、ニューヘブリデス、ニューカレドニアを含む東方型メラネシア人の両者の谷間に位置し、オセアニアの原住民の中で最も皮膚の色が黒い、いわゆる “Black Spot” の地域に一致している。そしてそこに文化的統一性を生みだした基盤としては、New Georgia 島の Roviana ラグーン・Munda を中心にした首狩と戦争、それに、これら島々相互間における非常にインテンシヴな交易関係を考えることができる。首狩や戦争のもつ機能は、各島、各部族間の対立、離反関係を生み出すよりも、たしかに一つの文化的交流として作用したようであり、奴隷としての捕虜の捕獲は、そうした同化混合を一層強めたと考えられる。(われわれは、Vella Lavella 島の Supato 部落で首狩の時に Isabel 島から捕虜としてつれてこられたという老人に会うことができた。)また交易関係についてみると、そこには非常にインテンシヴな網目状の交渉が成立している。たとえば、Vella Lavella 島 Paramata では、乾燥させたナツンの実、Salamani と呼ぶパンダナス製の女性用の雨笠が、Simbo, Munda (New Georgia) Ganonga 各島へ移出され、移入品として、Munda からは籐製の楯、貝製の腕輪、灯心用の油、プディングをつくるときに用いる木製容器などが、Simbo 島からは貝貨と貝輪が、Ganonga 島からは貝貨が、Isabel 島からは木の繊維で編んだ布地がそれぞ

れもたらされる。また Simbo 島は、Choiseul, Vella Lavella, Roviana, Ganonga, Shortland, Savo などの島々と密接な交易関係が出来上っている。従って、島民の家屋の中に入ると、そこに物質文化諸要素の交渉関係を一目で見渡すことができるのである。また、すでにのべたように、Choiseul, Vella Lavella, Ganonga, New Georgia の各島民が、死者の靈魂の行き（へんじり）として、一様に Simbo 島の Patokio 山を指し示めし、Shortland あるいは Bougainville 島に帰っていくと信じていることは、精神文化の面においても古くから、そこに地域的統一性があったとみることが出来る。こうしてみると Roviana 語のひろがりには、このような文化的な基盤の上に成立しているものであり、二次的には、さらにその上に乗ってキリスト教メソジスト派の布教がなされ、現在の殖民行政の西部地方区がなり立っていると考えられるのである。

さて、それではこのような文化的統一性をもった Roviana 語文化圏に対して、すでにのべた氏族的な地域個体が、どのような形でかゝわりあい、結合していたであろうか。これについては、まだ充分な検討を行っていないので、ここでは一つの見とおしを提示するにとどめたい。(1) Roviana 語文化圏はトライブやクランの文化を越えいくつかの島にまたがって、いわゆる Overing Culture を形成している。(2) その文化圏（サークル）への参加のしかたは、トライブやクランの個体ごとに、それぞれ行われていて、島がその時の単位にはならなかった。(Simbo 島の如き小さな島は別として) (3) その単位は Choiseul 島や Vella Lavella 島におい

てみられたように、一つの島の中にいくつもの言語地域が形成され、それら相互の間にコミュニケーションが成立しない程の閉鎖性を示めていたことなどから考えられる。(4) 従って個々のクランの交流は、Roviana 語文化圏のサークルの中に入って、はじめて行なわれたと考えられる。(5) 一つの島が地域的統合の機能をもたず、しかもまた Roviana 語文化圏の上にまたがる政治的統合が、過去においてみられない。つまり、超部氏族的な、大酋長による政治統合をみいだすことができない。(6) このことは、それぞれのクランが等質的な同位関係において、デモクラティックなつながり方を成立させていたことを考えさせる。(7) このような政治組織や、言語における分散は、メラネシア的な特徴を示していると考えられる。(8) そして、こうしたクランの地域個体が、Roviana 語



C. A クランの地域個体
R. Roviana 語文化圏 Isl, 島

Fig. 10
Roviana 語文化圏とクランの
地域個体との関係

を媒介とする、より大きな地域圏とかゝわりをもつ、あり方は、集落立地が、山間部から海岸低地へ遷移した後にひきつがれて、より一層、緊密な度合を高めていったと考えることができるのである。

IV 展 望

メラネシア文化史の中で、Roviana 語文化圏の占める役割は極めて重要であると考えられる。ポリネシア、メラネシア、パプア文化の関係を考える上での Roviana 語文化圏の空間的な位置は、両方に広がる扇のかなめの部分にあたる。すなわちソロモン諸島を東側から大きく取り囲んで、Onton Java 島、Sikaiana 島、Rennell 島、Bellona 島、Tikopia 島、Anuda 島などの島々が、ポリネシア・コロニーを形成しており、諸島内においても、その東南部の Isavel, Malaita, Guadalcanal 島など、比較的大きな島の東側海岸にポリネシア系要素がみられ、それが Roviana 語文化圏に属する島々の文化との間に、力関係を成立させている。また Bougainville 島、Shortland 島を通じて来るパプア文化の影響は、Simbo 島、Vella Lavella 島、Choiseul 島などにみられ、こゝにもまた、Roviana 語文化圏との間に、力関係のほりあいが見とめられる。こうした文化的地域性の把握は、文化史的研究に際して、最も重要な仕事であると考えられる。また、メラネシア文化史にとって重要な文化要素であり、そのインデックス的役割をもってあるかのように考えられている土器は、この Roviana 語文化圏の中では、主要な座を占めていない。ソロモン諸島における土器製作

圏は、西北端の Buka 島、Bougainville 島を中心にひろがり、Roviana 語文化圏においては、Shortland グループと、われわれが調査した Choiseul 島の西北端部を限界として、その中心部へは及んでいない。発掘調査を行なった Veala 集落址からも、一片の土器すら発見されなかった。こうした問題は、ひろくメラネシア文化史の中で考えなければならぬ重要な課題の一つである。また、Veala や、Tumbuo で行なった集落遺蹟の発掘調査の結果は、これを近年明らかになってきた Fiji 諸島 Vitilevu 島の防塞集落址と対比してみなければならぬ。そして、さらにポリネシア各地で行なわれている考古学的調査の成果と比較する必要がある。また配石遺構と灌漑遺蹟の調査は、メラネシアにおける巨石文化の研究に、いくばくかの資料をうる事ができた。今後、型式学的な検討を経て、そのヴァリエーションを適確に把握しなければならぬ。従来、オセアニア文化史の研究は、主として民族学的な材料によって行なわれてきた。そして、まだ将来においても幾多の研究領域が残されているといえる。だがしかし、われわれの今回の調査の体験では、今後この方面からする研究の困難さを痛感させられた。それほど、ヨーロッパ文化との接触による伝統的な文化の破壊が著しいのである。タブー観念の強い原住民の思考は、新しい価値観の導入によって、一八〇度転回して、従来の伝統的文化の多くの側面に対して、逆にタブー観念が働いている現状である。今後、この方面の研究にとって、考古学的方法は、欠くことができないものとなってきていることを認めなければなるまい。(3・Mar・1965)